

釉裏金彩

釉裏金彩は、切り出した金箔片と金泥で文様を描く、比較的新しい陶磁器の下絵付け技法である。2001 年に重要無形文化財に指定された。

金は古くから陶磁器の装飾に用いられてきた。中国では古く宋の時代（960-1279）から金彩（焼成後に塗布）が行われていた。日本には 17 世紀に渡来し、有田（現在の佐賀県）や九谷（現在の石川県）の陶芸家たちが金彩を施した作品を制作するようになった。その後、金箔を使うようになり、金襴手と呼ばれる技法に発展した。

金は、釉薬がガラス化する際の高温で溶けたり歪んだりする性質がある。そのため、金襴手などの金装飾は、最終工程で施される上絵付けの技法で、より低温の焼成で封じ込められるのが一般的である。しかし、これでは金が表面近くに残り、時間が経つとすり減りやすくなる。

1960 年代前半、石川県の陶芸家・竹田有恒（1888-1976）は、「釉裏金彩」という新しい技法を開発した。金箔を 2 層の透明な低温釉薬で挟み込むことで、金箔を傷から守り、柔らかな光沢を持たせることができる。

釉裏金彩は、まず高温の釉薬で陶磁器を焼成するところから始める。そして、トレーシングペーパーに絵柄を描き、11 センチ四方の金箔からどのように必要な形を切り出すかを考える。それぞれのピースには、デザイン上の場所に対応する番号が付けられている。厚さ 1 万分の 1 ミリほどの繊細な金箔を、デザインを写し取った 2 枚の厚い紙の間に挟み込む。ピースは手作業で切り出される。複雑な作品になると、何百もの小さな形が必要になることもある。次に、接着剤となる低温釉薬を薄く塗り、トレーシングペーパーからパターンを転写して、陶磁器に貼り付けるための下準備を行う。ピンセットで小さな金箔を一枚一枚貼っていく。息がかかっただけでも傷つきやすいので、細心の注意と集中力が必要となる。

金箔を貼り付けたら、金色の絵の具や金粉を塗り、針のような道具で金箔を引っ掻き、線をひくなどして、細部を描き加えていく。乾燥させた後、透明な低温釉薬で金箔をずらさないように塗り、本焼きをする。

名人は銀箔やプラチナ箔を用い、箔を重ねたり、金箔の厚さを変えて質感や不透明度を変えたりすることで、多彩な釉裏金彩の表現が可能になる。

2001 年に重要無形文化財保持者に認定された吉田美統（1932-）も、この「釉裏金彩」技法にゆかりのある石川県の作家である。